

# 臼杵・杵築の台場跡を訪ねて

矢野 彌生

(会員 佐伯市中山区)

四月十三日(土)、快晴で心さわやかな朝を迎え、佐伯史談会員十九名は、年中行事の一つである日帰りバス研修旅行を実施した。午前八時に佐伯を出発、晴天のせいがか心がはずむ。

彦岳トンネルをぬけ、津久見から臼杵市へ。臼杵の台場(江戸末期、要害の地に大砲を据えつけ、海防に備えた砲台)を三ヶ所ほど見学、杵築市へ向かう。杵築の台場跡二ヶ所を訪ねた。

杵築の町は、現実とは思えないすばらしい町並であった。日常生活では味わえない新鮮な気持が湧き、ちよつとした探検心をそそるものだった。探訪の一端を報告したい。

## 一、臼杵の台場

〈丘上の突出部にあつた下り松の台場跡〉 わたしたち史談会員を乗せた小型バスは臼杵駅から東へ、臼杵湾南岸沿いに一時ほど走ると、今日の最初の巡検地、下り松に着く。一行は小野・五十川の両氏に案内されて現地へ。

下り松は道路からすぐ南へ民家の脇を通って、急傾斜の山林の中を一列で登る。台場跡は標高三〇メートルの



下り松台場跡を調査する史談会員

ヤブの中にあつた。ヤブの中なので展望は極めて悪い。しかし、わたしは少年のころ、重岡村の山中で遊んだ頃を思い出して、何か気持が安らぎ、一度ここに来たことがあるような気がして



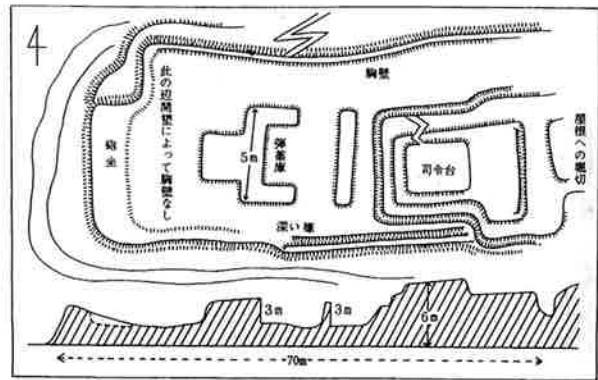
下り松の台場跡のある丘陵地

きたから不思議。年を重ねても、わたしにとつて、野性的なもの、自然の新鮮な魅力には弱いようだ。

さて、白杵市の郷土史家である高橋長一氏の『白杵物語』（昭和五十三年刊）

には下り松砲台について次のような記述がある。

下り松砲台は下り松の丘上の突出部に築いたもので今でも比較的良好に保存されている。海面より三〇米の高さに南北の長径六〇米程で、東西では三〇米程の広さで南北の高い所が指令台らしい。台地で、一段下つて犬走りの帯状の平地がある。これは後方はかなり広い平地となる。この一帯の台地の下にも一文字の堤が築かれ、その前面には弾薬庫あらし



第1図 下り松砲台の見取図（高橋長一氏による）

る。恐らく砲座もあり、小銃の射撃出来る様構えられたものであろう。幸いに山林になつてゐるのはうれしい限りである。

史談会一行は下り松の台場跡を見学したあと、次の台場跡へ向かう。下り松から目前の白杵湾に浮かぶおにぎ

い土塁に囲まれた土地もある。又司令台の西方には深い塹壕が一文字に掘られている。以上の構築地の東と北即ち白杵湾に面した平地は周囲に土塁がめぐらされてい



下り松から津久見島を見る

りのような可愛い津久見島を見る(下り松の海岸から四・五<sup>きざ</sup>ぐらいか)。ミカドアゲハチヨウの生息地として知られる。一度訪ねてみたい。民宿もある。島の周辺が明るく染まるとき、月に

似ているので月見島と呼んだという説がある。(洲崎・本丸の台場跡) 下り松台場巡検のあと、洲崎の台場跡の見学に向かう。洲崎の先端には壮大な石垣を築いて砲台を造ったという。

石垣が一直線ではなく、中央部が突出しているので、丁度将棋の駒の頭の様になっていたので「将棋頭の砲台」と言ったという。今に残る東中学校の東の石垣がその名残りである(写真参照)。ここが、臼杵藩の中で砲台中最大

規模をもっているといわれる。

洲崎台場の築造にあたっては三万二〇〇〇人の農民を人夫として駆り出しており、農民の肩にはいつも重い負担が背負わされていたのである(『臼杵市史』上)。

現在残っている洲崎台場跡は写真にあるように石垣を築いた土手である。私はこの土手は台場という国防上の価値だけではなく、潮防堤の役割もあつたのではと思つた。



洲崎の台場跡

次に、臼杵城

の本丸にある台場跡を訪ねた。

そこに残っている

台座石の大きさ(二つあつた

一つ)を測定し

てみた。台座石

(写真参照)の

大きさはタテと

ヨコは六〇センチ

一八〇センチ、高さ

一八〇センチ、高さ



臼杵城本丸の台場跡（台座石）

は三四サと、予想したより小さいものだった。

二、幕末の臼杵藩の軍制改革の推移

（農民鉄砲隊を編成した臼杵藩）

臼杵藩では、寛政四年（一七九二）、すでに「軍国船漂流之節手当」を定

（一八六三）には第1表・第2図のように台場を築いた。

文久二年六月、農兵の編成が行なわれ、丹生地区の場合、農兵五人に伍長一人がつき、一伍を編成し、数伍をもって一組

め、幕府に報告しているが、これによると、備頭以下大筒役、鉄砲足軽等総人数三三二人、船三三艘が一番手として出動することになっていた。

また、文化五年（一八〇八）の対外関係緊張時には、津久見湾側の長目浦に篝番所<sup>かがり</sup>を設け、大筒二十挺を備えて防備を固めた。

天保十三年（一八四二）には、「異国船渡来之節手配絵図」

及び海岸絵図等を幕府に提出し、同十四年には川登（現・野津町川登地区）大庄屋を長とする川登鉄砲隊（農民鉄砲隊）及び藩兵からなる種子島大砲隊を編成した。

臼杵藩は、以上の如く極めて忠実に幕府の指令を守りながら、海岸防備の充実に努めていたのである。

その後、ペリー来航（嘉永六年）前の嘉永三年（一八五〇）に、臼杵湾入口の楠屋崎に台場を築き、更に文久三年

（一八六三）には第1表・第2図のように台場を築いた。

文久二年六月、農兵の編成が行なわれ、丹生地区の場合、農兵五人に伍長一人がつき、一伍を編成し、数伍をもって一組

め、幕府に報告しているが、これによると、備頭以下大筒役、鉄砲足軽等総人数三三二人、船三三艘が一番手として出動することになっていた。

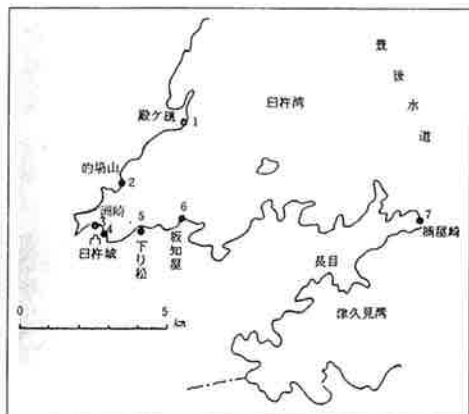
また、文化五年（一八〇八）の対外関係緊張時には、津久見湾側の長目浦に篝番所<sup>かがり</sup>を設け、大筒二十挺を備えて防備を固めた。

天保十三年（一八四二）には、「異国船渡来之節手配絵図」

（市立臼杵図書館蔵）



「海岸深淺図」（市立臼杵図書館蔵）



第2図 白杵藩の台場

しかし、記録によれば、当時白杵藩の大砲は国崩くにくずれや星山流・荻野流などという旧式のものが多い、西欧の

筆)。しかし、記録によれば、当時白杵藩の大砲は国崩くにくずれや星山流・荻野流などという旧式のものが多い、西欧の

No.	台場	築造年
1	竹田津枇杷崎	嘉永3年
2	来浦大崎	〃
3	黒津崎	〃
4	行者崎	〃
5	美濃崎下り松	〃
6	加賀権現崎	〃

第2表 杵築藩の台場

No.	台場	築造年
1	殿ヶ原	文久3年
2	的場山	〃
3	洲崎	〃
4	本丸	〃
5	下り松天神ヶ鼻	〃
6	板知屋琵琶ヶ鼻	〃
7	楠屋崎	嘉永3年

第1表 白杵藩台場

とし、各組には組目付がおかれていた。このような編成の農兵組が、恐らく領内全域に組織されていたのである(『幕末海防史の研究』・昭和六十三年・一部加

近代的兵器を装備した軍艦を打ち払うことができたかは大いに疑問である。幸いにして、この旧式の大砲が戦火を開くことがなかった。

また、佐伯藩でも城下に訓練所を設けて軍事訓練にはげみ、文久三年(一八六三)に女嶋の新沖ノ洲に砲台を築き、大砲試射をしている(『佐伯市史』)。

三、杵築の台場

(杵築藩、台場六ヶ所に設置) 杵築藩は、瀬戸内海に位置していたが、ペリー渡来前の嘉永三年(一八五〇)第2表のように六ヶ所の台場に築いた。

瀬戸内海側に位置する藩の中で、ペリー渡来(一八五三)以前に台場を築いたのは、他には萩藩と姫路藩のみである。

慶応元年(一八六五)、十五歳〜五十歳の農民の中から強壯



杵築城より守江湾を見る

の者を選び、農兵隊を編成した。編成は、十人を一組として組頭一人をつけ、平常は五十人(五組)を単位として、十日宛城下に詰めるというものであった(『幕末海防史の研究』)。

また、杵築藩では農兵隊の兵士には給与を支給し、諸公役を減免し、あるいは住居や生活用具を貸与するなど、一定の優遇措置を講じている。農兵の募集はゆるやかなもので、強制的な徴発ではなかった(『大分の歴史(7)』)。

〈美濃崎下り松の台場跡から杵築城下へ〉 史談会一行十九名は、十二時すぎに杵築市へ高速道を経て到着すると、最初に杵築市の中心部から八段ほどある美濃崎下り

松の台場があったところを見学した。台場があった美濃崎下り松からの瀬戸内海の展望はすばらしい。

美濃崎の台場跡の見学のあと、わたしたちを乗せたバスはひきかえし、杵築城へ向かう。

途中バスの車窓から守江湾を眺めて、すばらしい景観に出会った。おそらく百名近い人々が広い守江湾の干潟で、くま手やバケツを手に潮干狩りを楽しむ人々が遠望できた。今ごろはアサリやハマグリは身が大きく食べごろという(天然のハマグリが健在なのは全国で大分県だけ)。

丁度わたしたちが杵築を訪ねた四月十三日(土)は週末と大潮が重なったことが幸いして親子連れの人々で賑わっていた。潮干狩りの解禁期間は六月三十日まで。八坂川河口近くで入り浜料(一人五百円)を支払うという。訪れる人は杵築の人とは限らず、市外から潮干狩りにくる人々も結構多いということである。

さて、わたしたちは午後一時ごろ杵築城へ着く。昼食のあと、昭和四十五年(一九七〇)に復元された杵築城(三層の天守閣は全国最小・新城は鉄筋コンクリート造り、天守閣まで約二〇メートル)を見学。

新築の城内には譜代松平三万二千石の藩主の鑑ようらいやかぶと、古文書などが展示されており、歴史資料館だ。天守閣下には古代公園(国東塔・宝塔・五輪塔など、各地から収集された多くの古石塔類を並べた史跡公園)、藩主御殿の庭、市民会館がある。

また、城内には台場跡(一個の台座石)が見られた。

〔初代藩主松平英親の業績〕 松平英親ひでちかが在務五十年間、多くの業績を残している。城郭を整備し、南台と北台の武家屋敷の区画整理をし、南台・北台の間の谷川沿いに町屋の配備を考え、広小路やT字路の建設も行った。

農業振興政策を推し進め、尾払池おほらい・白水池しみずなどの溜池をつくり、三川新田などの新田開発・七島蘭しちとういの導入も行なっている。七島蘭は大庄屋森永五郎右衛門に日出藩から伝えられ、英親が奨励して領内に広まったという。七島蘭からつくられていた青筵あじろは「豊後表」の名で大坂へ出荷され、杵築城下は青筵の集散地として繁栄を誇った。

文化五十八年(一八〇八―一)を除いては藩が青筵を直接買占めることはせず、特定の商人に売買を認める間

接専売の形をとったため、生産が大いに伸びたという。

英親のあとも優れた藩主が多く、城下町づくりや、産業開発を行なっている。なかでも二代重栄しげとし・九代の親良ちかよしのように小藩主でありながら幕府の寺社奉行に抜擢されたものもいる。また、学問に力を入れ、学者を登用したり、藩校(のちの学習館)の設置や寺小屋・私塾の開設を認めるなど文教の道を開いた(『大分県風土記』・『杵築市誌』)。

〔貝原益軒が見た杵築の状況〕 元禄七年(一六九四)に杵築を訪れた貝原益軒かいばらえつけんは、その『豊国紀行』のなかで、当時はまだ木付きつきと称していた当地の状況を次のように記している。

「木付は東北に海有近し、入海有、城跡有、此地魚甚多し、美酒あり、松平市正いちのちかみ(英親)殿の居所なり、城なし町有、中津川なかつより木付迄十三里、木付の町は山と谷とに有て坂多し、昔は細川忠興たかあきの領せられ給し時の城跡海辺に有」

益軒が訪れた元禄七年といえは、幕末にいたるまでの地を支配した、杵築藩三万二千石松平家の基礎を築いた初代藩主の在世中で、英親ひでちかはすでに隠居して、二代重



一松邸より杵築城を見る

栄が家督を継いでいた。

益軒の記述はさすがで、簡略ななかにも、当時の状況を彷彿とさせるが、「城なし」「城跡」とあって、現在の城山公園の台地上にあつた杵築城には、すでに天守もな

く、城跡といわれるようなありさまであつたことがわかる。これは細川氏が城当時の元和二年（一六一六）その前半の「一国一城令」によつて多くの櫓が取り払われ、すでに城の中心は、台地北の平地に移された領主の居館にあつたからだと思われる。

守江湾に注ぐ八坂川と高山川の合流地点に突き出た段丘砂礫層の杵築台地に、いまは昭和四十五年に建造され

た三層の杵築城の模擬天守が建っているが、松平家所蔵の古図によれば、当時この台地は地つづきの西側を除いて三方のすぐ下にまで海浜が迫っており、とくに満潮時には、水に浮かぶ海城にも見える平山城であつたといわれる（『城郭と城下町』一部加筆）。

### 三、坂の城下町杵築散策

〈城下町の面影を色濃く残した景観〉 わたしたち佐伯史談会の一行は午後二時前に城の見学を終わり、きつき



第3図 杵築市の中心部  
（『城下町歴史散歩』より引用）

城下町資料館に立ち寄つたあと市内の武家屋敷跡や商店街を散策した。

杵築市は大分県のほぼ中央に位置し、国東半島の南の玄関口にあつている。





### 武家屋敷跡

八坂川に沿って開けた町で、昭和三十年（一九五五）杵築町を中心に一町三村が合併して市になった（人口二万二千七百人・平成十二年）。

杵築の主な産業は農業で、平坦地域には主として米・麦や施設野菜、周辺丘陵地域には茶が栽培されている。特にかんは県下一の主産地で、い草も有名。

町は中央に標高三〇〇〜四〇〇の台地（北台・南台）があり、南台には妙経寺（日蓮宗）・長昌寺（浄土宗）などの寺が多く、北台は昔ながらの武家屋敷の土塀が続ぎ、城下町の面影を色濃く残した景観は心をなごませる。二つの台地の間の谷間は商店街となっている。

（散歩するほどに歴史が近づいてくる） 武家屋敷を訪ねると、野面積みの低い石垣の上に土塀をめぐらし、長屋門を構えたような屋敷がいくつが残っているのを見ることができた。また、志保屋の坂から台地にのぼると、石垣や石段が長塀・長屋門とともに城下町時代のおもかげを残していると思った。

東西にのびる二つの台地には、今も一七〇〜一八〇の武家屋敷跡が残り、北台・南台の谷間には近代化から残り残されたような古い、なつかしい面影を残す商店街。このような城下町の面影を多く残しているのは、県下



志保屋の坂から酢屋（すや）の坂を見る

